

令和元年度 第2回八尾市産業振興会議 議事概要

| | |
|-----|--|
| 日 時 | 令和元年 11 月 25 日（月） 13 時 00 分～15 時 00 分 |
| 場 所 | 八尾商工会議所会館 3階 セミナールーム |
| 出席者 | <p><委員> 忽那座長、滝本副座長、阿部委員、居相委員、樫本委員、佐藤委員、谷原委員、水野委員、美馬委員、三宅委員、山田委員、山本委員</p> <p style="text-align: right;">計 12 名</p> <p><事務局> 浅川部長、平尾次長兼室長、西野課長、矢野参事、内藤課長補佐、後藤課長補佐、藤原係長、松尾係長、村山、吉田 運営支援事業者 鈴木氏</p> <p style="text-align: right;">計 11 名</p> <p style="text-align: right;">総計 23 名</p> |

－事務局による司会で次第に沿って進行－

1. 開 会

事務局より、本日の会議は乾委員、梶谷委員、梶本委員、勝浦委員、高橋委員、寺西委員、築澤委員が欠席。全委員 19 名のうち 12 名の委員の出席となっており、八尾市産業振興会議規則第 3 条に規定する過半数の委員の出席により、本日の会議が成立していることが報告された。配布資料を事務局より確認。

2. あいさつ

経済環境部長よりあいさつ

3. 議 事

－座長による議事進行－

座長：本日は、平成 30 年度・令和元年度の産業振興会議では、「10 年後の八尾市の産業について」をテーマとし、「八尾市の現状についての認識を深め、10 年先を見据えた産業振興のあり方」について検討部会に付託し、議論してきた。本日は、検討部会で議論してきた内容について検討部会委員の皆様から報告を頂き、12 月 24 日の提言書報告会に向けて、質問やご意見を頂きたい。また、それらを受け、提言書の承認を頂きたい。まずは、これまでの議論の総評について、私から報告する。

（1）座長より総評

座長：「Be Makers～創る人になろう～」という大きな目標を掲げて、3つの柱について検討してきた。ベン図をご確認いただくとチャレンジ、メンター、ファンの3つの柱がある。本日が提言書についての最後の意見交換の場となるが、私自身、形式も含めて、とてもチャレンジングで素晴らしい提言書になっていると感じる。本日皆さんよりご意見をいただいて、良いものに仕上げたいと考えている。

続いて、これまでの議論の総評について、副座長よりご報告願う。

(2) 副座長より総評

副座長：この2カ年の会議内容をイラストがある提言書として取りまとめたことは今まで見たことがない。2年間、みなさんとともに活発な議論ができたのではないかと感じる。また、普通であれば見過ごされそうな小さな意見もグラフィックによって表現されており、充実した中身になっている。みなさんの発言からわかったことであるが、意外にも八尾には世界で戦っていけるような競争力のある企業が多いということもこの会議からの発見である。そこをいかにして打ち出していくかが今後の課題となってくる。また、競争力のない分野の事業者にとっても、競争力のある事業者とタッグを組むことにより、新しいものを生み出す可能性があることも、今回の一連の会議からの発見である。いずれにしても八尾の未来は明るい。

(3) 委員より報告

【提言書について意見交換】

事務局：前回の会議で挙がっていたように、提言書とは別の形で、幅広い方に見ていただけるようなイラストが入ったリーフレットの作成を予定している。誰に手に取ってほしいのか、手に取った人にどのように行動してほしいのかを最後にご意見いただきたい。また、提言書はつくることが目的ではなく、この先10年をめざすための方位磁針のようなもの。提言書はこれが正解というわけではなく、さまざまな使い方があり。アジャイル開発のように小さなものをどんどん積み重ねていくやり方もあれば、設計図を作らずに対話の中でどんどん進めていくスクラム開発という方法もある。この10年間でどのようにつくっていくかを考えた意見が本日いただけたらと思う。

座長：続いて提言書の具体的な項目について、検討部会に属する委員の方々からご報告願う。

【Make a Challenge (イノベーション)】

委員：この2年間はグラフィックファシリテーションという手法も取り入れ、新しい視点で議論ができたと思う。そのおかげで、カラフルで一般の方にも読みやすい提言書になってきた。いくら良い提言書を作ったとしても、市民に読まれない提言書は意味がないという委員の想いと意見が詰まっている。まずはこの場で一緒にご議論いただいたみなさんに感謝を申し上げたい。

チャレンジの話をする、大前提として10年後は人口が減少していると予測できる。人口が減ると税収が減り、使えるお金が減ってしまうという悪循環になる。最悪は現状維持、最高は人口増加をめざさなければいけない10年だと感じている。このようにして議論は明るくはない未来予想からのスタートとなった。その中で明るい未来の八尾をつくるには、「イノベーションの創出」が必要になる。イノベーションの創出のためには3つポイントがある。

① コラボレーション／クロスイノベーション

八尾市は1万2千社の工業・商業の事業所がある、関西でも有数の産業集積地であり、多くの異業種交流グループ、商店街をはじめとした地域に特化した団体が意欲的に活動している。「地域を、このまちを良くしたい」という大きな想いは同じではあるが、垣根を超えた活動やつながりはほとんどなかったというのが現状である。それは、市内の団体だけではなく、市役所の中でも同じことが言える。また、企業側も同じである。

昨今は「コラボレーションが必要」ということはどのまちにもあてはまることで、どこでも取り組んでいそうなお題目であるが、八尾市で「共創が生まれる場」はまだまだ弱いと感じる。また、これまでも諸先輩方が様々な議論を積み重ね、同じような結果に至った。

産業振興会議には同友会の代表の三宅委員、昨年度青年部の会長の美馬委員、昨年度環山楼塾OB研究会代表の居相委員が出席されている。私はみせるばやおの理事をしており、4団体が参加していることになる。また、他にも各団体の代表の方がいる。過去にこれだけの数の各代表が集まったのは初めてであり、この4団体だけで参加企業は300社以上である。この提言書は「共創していこう」というメッセージでもある。

拠点づくりとしてはみせるばやおが昨年オープンし、すでに会員企業同士でコラボレーションし、商品が生まれている。今年の7月にはみせるばやおで、みせるばやおのメンバーと、商工会議所青年部のコラボ例会が開催された。少しずつではあるが、この1年間で垣根を超えたコラボレーションが増加してきている。10年先を見据えた1年目としては、物凄く進みすぎた1年だったと感じる。今後の目標は1万2千社に対して10%の1,200社がなんらかの形で繋がることであり、10年先に向けてすでに始動しているということを強調する。

座長からお話いただいた深圳のレポートにあった共創の仲介役である「デザインハウスのコミュニケーター」に私の仕事を活かしてめざしたい。この数年で「共創が生まれる土壌づくり」は実現可能だと感じている。その実現に必要なのが、2点目のシェアリングプラットフォームである。

②シェアリングプラットフォーム「働く人のための改革（AI・IoT活用促進）」

シェアリングプラットフォームは、さまざまなものをシェアすることを意図している。仕事・人材・教育・家事・育児等さまざまなものが対象となる。企業間では営業車や倉庫等がシェアリング対象となる。シェアリングを実現可能にするのが、AI×ビッグデータ・IoT活用促進である。しかし、問題は山積みである。市内にはシェアリングを可能とするためのプラットフォームとIT人材というものが決定的に不足していると感じている。私自身、各団体に所属し、各団体でプラットフォームが違うことを痛感している。ITとIoTの導入が遅れているのが現実である。

また、国としても女性の社会進出は課題として挙げられているが、八尾の産業の強みである製造業においては、子連れ出社や短時間労働等はまだまだ進んでおらず、仕事をしたくても社会参画できない人が存在しているのが現状。

5Gの運用もいよいよ近づき、10年単位でいくと、ITは予測がつかないほどのスピードで進んでいく。なおさら八尾にはシェアリングプラットフォームが必要だと感じる。

③多様性（認め合うことでイノベーション）

3つ目のポイントとして多様性を挙げたい。今年の6月に八尾出身の映画監督である三池崇史氏の講演があり、その中で子どもの頃から八尾はダイバーシティだったという話があった。つまり、八尾には多様性を認め合うというポテンシャルはあるということだと感じた。八尾の外国人登録者数は人口の約2.78%にあたる7,420人。シリコンバレーは移民者が3割であり、八尾にあてはめると8万人くらいになり、イノベーションを生み出す上で必要なカオスが生まれやすくなる。様々な国の人を受け入れることが容易な市になればよいと考えている。今の人口に8万人足すと35万人くらいになる。障がい者や、高齢者、LGBTなど、多様性を認め合い、それぞれが活躍できるような「ごちゃまぜコミュニティ」を八尾はめざしたいと考えている。

今より多様性を認め合う土壌、共創が生まれる土壌、ITに対応する土壌、これらがうまくかみ合わさることでイノベーションの創出が可能となる。そして、提言書に「Be Makers～創る人になろう～」とあるように、私も当事者として創るひとになりたい。

委員：シェアリングプラットフォームについて、フリーランス等が認められてきており、企業で働きながら自分の能力を試したい、やりがいを試したい人が増え、ランサーズやクラウドワークスのようにクラウド上で人材をシェアできるようなプラットフォームもできてきている。このようなプラットフォームが八尾にもあればいいと思う。また、定年後も活躍できる人の能力をシェアリングできればいいと思う。最近では働く女性、働きたい女性が増えてきている。子育てしている人にフォーカスすると、子どもの教育や習い事もしっかりと取り組みたいが働きたいという人がいる。現実的には、子連れ出勤などの制度が整っている企業はまだ少ない。私の場合、子どもが小さいときは病児保育を利用したこともあり、そのときは有難いと感じていたが、今になって考えると、病気の時くらいは一緒にいてあげればよかったと後悔がある。その経験を活かして、今の事務所のパート4名に対しては、子どもが病気のときは一緒に休んでもらっている。子どものことを中心に考え、都合のよいときに都合のよいだけ働いてもらい、みんなに柔軟な働き方ができるように努めている。みなさんにはそのような働き方をとても気に入ってもらっている。

また、働く女性にとって、もう一つネックなのが、家事である。家事代行サービスは存在するが、まだまだ贅沢だという意識があり、気軽に頼むにはハードルが高い。市内では家事代行サービス自体がほとんど普及しておらず、その道のエキスパートに育児も含め家事の負担もシェアリングすることで、働きたいときに働けるような環境を作り、おせっかいなまち八尾ならではの気軽に頼めるプラットフォームがあればいいと考える。

企業側も働く人のための改革が必要となる。また、AI や RPA などを活用し、空いた時間で人と人とのつながりや、本来、人にしかできないクリエイティブな仕事ができるようになれば、やりがいのある仕事に注力でき、働き甲斐のある環境が整う。AI や IoT を脅威として捉えるのではなく、積極的に取り入れていくための支援があればいいのではないかという結論に至った。

【Make a Mentor (人財育成)】

委員：まずはまちまるごとメンターから説明する。私は、次世代経営者育成講座、環山楼塾 OB 研究会の元代表であるとともに、環山楼塾 11 期生でもある。経営者、後継者は孤独な立場にあり、私もまたそれを経験している。環山楼塾で同じように家業の跡を継ぐ仲間と出会い、支えられたからこそ、このまちに少しでも恩返しをしたいという気持ちが芽生え、この会議に参加している。環山楼塾の中では経営者がお互いの抱えている課題を共有し、解決していくことで、モチベーションを上げていく。また、私は同友会にも所属しており、これもまた同じようにお互いを研鑽し合えるような場である。

OB 研究会では、先輩が後輩をメンターとして支えるような風土があり、経営について親身になって相談に乗ってもらえる相手が身近にいるということは、経営者にとってこの上なく安心できる環境である。これがまちまるごとメンターにつながっている。先人の経験が後輩に受け継がれていく循環があるということは、まちとしても力がついていくような仕組みだと感じる。

仕組みとして定着していくと、起（企）業しやすいまちにもつながっていく。企てるという字を用いているのは第二創業等も視野にいれているからである。起業したいという環境づくりも大事である。風土は違うが、アメリカでは起業家が大学に対して寄附を行い、次世代の起業家を育てるということがある。同じように八尾版エンジェルと称して投資し、まち全体で起業家を育てていけるような環境をつくっていきたい。

最後に子どもの企業家教育について話したい。現在、学校教育の中ではお金儲けのための教育はタブー視されているが、社会人になったときに準備ができていなくて困るということは多々ある。例えば八尾商工会議所の青年部のジュニエコのように、子どもたちに商売を教えるものがある。私の息子も参加してお

り、自分たちで考えた商品を販売するという経験をさせてもらった。子どもたちが取り組む姿をみて、自分も子どものころに経験してみたかったというような思いが芽生えた。このような仕組みをもっと根付かせていければいいと感じた。そのような意味で子どものころから企業家をめざすような環境づくりが必要である。

委員：先々週、震災後の東北をみてきた。八尾のまちづくりは恵まれていると感じた。東北では学生になると同時にまちを出ていく人が多い。まちづくりを行っていくにはやはり、その世代が子どもの頃に教えてもらった経験や、地域とのかかわりが、その後の八尾とのつながりにおいて非常に重要になっていると感じる。自分自身もお金のことについて、子どものころから学んでみたかった。まちを発展させようと思うとやはり経済的に潤うことも大事。商売しようとする人が増えるためには、まちに活気がないとやっていけない。サイクルを回す上では重要な部分。先ほどでてきたようなファンドや、学生との関わり等、さまざまな取組が必要である。

【Make a Fan (ブランディング)】

委員：ブランディングについて議論を重ねた結果、出てきた答えが「Make a fan = つながり」であった。私たちのまち、今の八尾、未来の八尾も Be makers 創る人が必要です。創る人とは誰もがこのまちの主人公であり誰もが八尾のまちをクリエイティブにしていく参画者。

Make a fan のつながりを創る方法は2つある。1つは、内への発信、住み続けていく郷土愛の醸成である。働き続けるまちにするために、いかに働きやすいまちにするのかという議論になった。現在、今年の8月にオープンしたみせるばやおのおかげで他業種がつながる場ができ、企業間の連携が生まれやすくなり、クリエイティブな商品やサービスが生まれてきている。今後は、若手社員同士もつながれるような合同運動会や、若手社員がピックアップされるような場の提供を行い、八尾で働く若者が生き生きと楽しく働ける環境を創ることでさらに「Make a fan つながりすぎるまち」になるという結論に至った。

もう1つは外への発信、全国・世界へのPRである。八尾には1万2千社の企業があり、その内の3割がものづくり企業である。オンリーワン、ナンバーワンの技術を保有する製造業が多いものの、中小企業は人手が少なく、後継者不足などの問題も重なり、残念なことにその技術が途絶えてしまう可能性がある。今後はその技術を、未来のため、そして八尾、日本、世界のためにも伝達伝承が必要。そのためにも、やはり企業間でのつながりと、社員間でのつながりによって、オープンファクトリーや産地ツーリズムなど足を運んでもらうしかけの創出や、私たち市民が、伝達伝承の参画者となることが必要となる。八尾の一人一人が世界へ発信する参画者となり、八尾の関係人口を増やすことで、つながりにより、八尾が世界へ広がっていくのではないかという結論になった。

だからこそ、私たちは企業や行政と、八尾と日本、世界とつながり、つながりを創る「fan」となり、八尾の誰もがこのまちの主人公、誰もが八尾のまちをクリエイティブにしていく参画者となる必要がある。

(4) 提言書についての議論

座長：ここからは、提言書について皆さまから多くの意見や質問を頂くために、全体で意見交換を行う。

【今後のスケジュールについて】

委員：12月24日に提言書を市長に提出後はどのようなスケジュールになっているか。

事務局：今年度の政策設計に反映しているものもあれば、政策企画部局に第6次総合計画への反映に向けて内申しているものもある。施策ごとに指標化し、3月以降にどのように具体化、実現していくのか提示

できればと考えている。

委員：総合計画はいつ頃からか。

事務局：令和3年の春からスタートになる予定。

委員：施策としては4月からどんどん出てくるようなイメージか。

事務局：例年の会議ではどのような施策が必要かという議論であったため、結果が目に見えやすい形で合ったが、今回は10年間の総合計画という形であるので、この頂いた議論の内容を総合計画の産業部門の中に反映する予定。今後10年間の目標という扱いになる。いかに提言書を見てもらうかという点では、教育部門とも調整しつつ進めていく。

【団体間の連携について】

委員：この提言書ではぼやっとしているところと、はっきりしているところが明確に分かれたような印象がある。イノベーションの部分では、未来が見えてワクワクするが、具体的な終着点を議論する必要がある。子どもの企業家教育については終着点がわかりやすい。IoTやAIにフォーカスするのか、人にフォーカスしていくのか、両輪でいくのかももう少し皆さんと議論してみたい。

事務局：他の委員もおっしゃられていたように、団体同士の連携等、人にフォーカスした内容に寄せているが、もう少し明確にしてもよいかもしれない。今までの議論を振り返ってみると団体同士の障壁を打ち破り、人と人とがつながることにより、何か新しいものを生み出す土壌づくり、イノベーションやクロスイノベーションへの議論へとつながってきた。

委員：八尾市全体という枠組みで考えることで違う議論もできるのではないか。

委員：連携すればいいという話ではあるが、連携はなかなかできていないというのが現状。そこにみせるばやおができたことによって、入口になっている。まずはみせるばやおを活用していければと思う。どんどん変わってきているのは感じる。各団体が同じプラットフォームで情報を共有できれば一番いいが、現状はさまざまなツールを活用している。一つのプラットフォームができ、全体の情報が共有できるようになればいい。これができれば様々な課題が解決できると思う。

委員：企業家のマインドを変えたいと思う。地域が変わることで自社にどのような影響があるのかデザインできる企業家が多くはない。自社が黒字であればいいというわけではない。地域に投資することにより、自社に還ってくるということをわかっていない。

委員：それを伝える方法が大事。ジュニアエコノミーカレッジをやっているのは特に中学生、高校生。私自身、高校で講師をしているが、実際に学生は社会人とふれあう機会は少ない。もっと企業家が学校に入り込んで教える機会が増えればワクワクする子どもは増えていくと思う。

委員：やっていることの広がりはまだまだ見えない状況。プラットフォームがあっても見ていない人が多い。マインドを変えていく必要がある。

事務局：情報発信、情報拡散については今までの産業振興会議でも何度も話し合われてきた。行政がアプローチできる範囲は限られている。次に発信するのは団体に所属している方たち。SNS等で皆さんが発信することで広がる。どう共感してもらうか、どう発信するのが課題となってくる。この提言書もどのような形で発信し、どうしたら使いやすいかを議論出来たらと思う。

【提言書の主語について】

委員：消費者や従業員、一般の人に対する項目が少ないように感じる。八尾を想う情熱がまだまだ伝わっていない部分があるように思い、もったいないと感じる。

事務局：情報発信以外にも「これがあれば、これがなければ…」というものを挙げてほしい。

委員：3つの柱で挙げているのであれば、人についてももう少しフォーカスしてもよいし、違う視点から発信してもよいと感じる。少しずつ変えていければと思う。

委員：例えばどんな方法がよいか。

委員：経営者同士が集まれる場所は多いが、従業員が集まる機会が少ない。みせるばやおでは合同研修会を開き、従業員やその家族がつながれるような提案もある。

委員：そのようなツールがもう少し増えればよいと思う。産業だけではなく、もう少し幅を広げてもいいように感じる。

委員：経営者だけでなく従業員同士がつながれるようになればと思う。

委員：産業が潤うことで自分たちにどのような影響があるのかがもう少し具体的にわかればよいと感じる。

今の生活にどのように影響しているのかわかれば、商業に関してはわかりやすいが、工業はわかりにくい。

事務局：伝わるメッセージにするにはどうすればいいのかのヒントとなる意見だと思う。すぐに変えられる点としては提言書の主語。今の提言書の主語は比較的リーダー的な視点からになっている。子どもが受け取ったときに自分事として受け取りにくい。

委員：その通りだと感じる。一步外側から引いてみてしまう理由はそこにある。

委員：便乗して言わせていただくとすると、市民同士でおせっかいなまちをどのように実現するかと考えると、八尾 Pay のようなものをつくり、例えば飲食店でいいサービスをする従業員がいれば、「いいね！」をすることでポイントが送られるようなツールがあれば面白いのではないかな。少しの経済効果が絡むような交流があればいいのではないかな。その送金は控除されるような仕組みがあれば面白い。おせっかい度合いが視えるようになれば面白い。

委員：農業、商業、工業のすべてが情報を共有してすればよいと感じる。

委員：先ほどの主語の話をする、もう一度主語は誰なのかは考える必要がある。また、「Be Makers 創る人になろう」は誰に対して呼びかけているのかを考えたときに、一般市民に対して呼びかけているのであれば横文字が多い気がする。専門用語に関してももう少し平易な言葉に変える必要がある。

事務局：80 ページの提言書を読むかと考えると市民にとっては難しい。そのため、イラストのついた概要紙を作る予定。わかりやすくビジュアルライズしたもの作る予定である。通貨については情報漏洩の課題を解決しながら今後どんどん広がり、種類が増えていくようになる。お金は使わないと腐ってしまうという考え方の通貨も存在し、浸透していくと考えられる。この会議の内容を自社の従業員にも共有している委員がおられる。

委員：従業員に伝えることにより、その従業員が自分も住んでいるまちをよくしていきたいという思いから、奈良の振興会議に参加するようになった。

事務局：今回は会議後に SNS などで発信する委員が多い。グラフィッカーについても同様。自分たちで発信していただくことも大切。

【地域とのつながりについて】

委員：それ以外にも自社のある地域との横のつながりも必要だと感じる。消費者や一般市民も巻き込めるのではないかな。

事務局：リーフレットは誰もが主役、クリエイティブに参加していく、オープンファクトリー、産地ツーリズム等を中心に掲載した方が見る人に届きやすいのではと感じたがいかがか。

委員：企業は発展し、八尾の産業が発展することにより、私たちも潤うということがわかるようなメッセ

一ツがあればと思う。みせるばやおだけではなく、もう少し小さい単位の地域で広めていけばいいと考える。入りやすいような何かがあればと思う。

事務局：企業の存在意義、社会的意義が重視されるようになってきている。国連が推奨する SDGs(持続可能な開発目標)のように、社会のために企業が社会課題を解決していくという考え方が浸透してきている。それを実践している委員もいる。子どもたちに家を作るワークショップを体験してもらうことによりリフォームを知ってもらう。また、他の委員の会社では、昔遊びを通して地域を知ってもらう活動をされている。このような取組はあるが、現状はまだまだ数が少ない。どんどんこの動きを作っていくためには、行政の力だけでは足りない。こうした活動が大切だという意味や意義を伝えていくのは行政の仕事でもある。

委員：産業振興会議は長年やってきて、同じ議論をしている中で、やっとここまでくることができたという経緯もある。やっと動き出せるというのがこの2年の印象。また、やはり議論の中心は産業にある。八尾の人たちの危機感や思いがないとやはり動き出せない。このままではいけないという思いをもって集ったのが産業振興会議だという経緯もある。

委員：それはその通り。これまでの経緯も含めて考えるとすごく情熱をもって進んできた印象はある。

委員：今回は「創る人がいないといけない」ということが一つの結論でもある。

事務局：皆さんが「自分たちが当事者」ということを言葉の端々に出しているのが今回のポイントでもある。行政側はどのような環境づくりができるのかを考えていきたい。

【SDGs について】

委員：人の流れをつくるのは非常にいいこと。それぞれの提言に SDGs のどの項目が関係するのかを追加するのはどうか。また、八尾市としてどの施策を落とし込んでいくのかを考えていけばさらにより提言書になると思う。

事務局：SDGs のことについても議論に挙げたこともあった。ぜひ入れたい。

委員：八尾版の SDGs があってもいいかもしれない。

【情報発信について】

委員：行政に一番してほしいのは情報発信。公式 YouTube アカウントを作って毎日発信してはどうか。各企業のイベントで困るのは集客。そこで宣伝してもらえれば嬉しい。関係人口を増やすうえでも効果的ではないか。

事務局：専門部署を作って力を入れるくらいでないといけない。

委員：動画の方が広報誌よりも情報量が多い。八尾市が情報源になってもらえたらいいと思う。

事務局：行政だけの情報発信は難しい。

委員：伝えれば伝えるほど参加する人は増えていく。

委員：パブリックコメントを動画で流しても面白い。

委員：やはり行政に期待することは情報発信。

委員：YouTube 等のようにもう少しライトな情報でもいいかもしれない。エンターテインメント性を持たせてもいいと思う。

委員：産業振興会議のようにどんどん新しいことにチャレンジしていけばいいと思う。

事務局：そうはいつでも皆さんが発信するのが一番。周りでよく知る人が発信元となるのが一番効果的。費用対効果を含めて行政で持つべきものなのかも議論する必要がある。みせるばやおではライブ配信しようという動きもある。

【リーフレットについて】

事務局：リーフレットは A3 を二つ折りする予定。10 年後めざすべきものをイラスト化し、そこに文字を足すイメージ。どのようなツールとして利用するかも含めてご意見いただきたい。提言書の概略版をイメージしている。

事務局：委員の皆さんが使えるようなものにしたい。誰が使うのか。誰向けに使うのか。

委員：市民に分かるものにしたい。学校でも企業でも議論してもらえるようなものがいい。

事務局：言い換えると問いかけが多いもの。

委員：配る場所は決まっているのか。

事務局：皆さんで決めていきたい。3 年生、4 年生の教科書副本には掲載できるよう交渉中。興味をもってもらえるような入口になればいい。

委員：広報やおに掲載できるか。

事務局：交渉する。

委員：ゴミ袋に印刷できないか。人目につきやすい。

事務局：至る所で目に見えるようにしたい。

委員：赤ちゃんから高齢者までというような流れがわかるようなものはどうか。主人公が成長していくような絵があれば自分事になりやすい。駅などにイラスト掲載すればどうか。

事務局：ビジョンのように壁に貼るイメージ。

事務局：どのようにしたら使いやすいか。

委員：伝道師として自分の顔が掲載されてもいい。依頼があれば伝えに行ってもいい。私が作りました！というイメージ。

事務局：「やおやおしている」「おせっかいすぎる」などのキーワードを入れて発信してもいいのではないかな。

委員：ハッシュタグをつけて発信していけばいいのではないかな。発信してもらうことが一番。ちょっとしたしかけがあってもいい。

事務局：発信の目印があった方がわかりやすい。

委員：いいと思う。

事務局：これを見たら行動しようという目印でもいいかもしれない。

委員：やおおクリーンデイのイメージですね。

委員：どの層に一番届けたいのかを考えるとどこがよいのか。どこを一番求めたいのかで発信の方法は変わってくると思う。

事務局：まちは多様な人がいる。発信したい人が発信したい人になげてくださいという呼びかけでもいいのではないかな。それがわかるような媒体でもいいのではないかな。

委員：これを作った責任者として 1 人あたり 10 人発信したとしても 200 人には届くはず。老若男女問わずわかるものでいいのではないかな。

事務局：今までの意見を反映して、誰もがわかるような概要紙にしたい。

委員：3 つの柱がわかるような説明は必要だと思う。

事務局：それをイラストで表現する予定。

座長：本日のご審議の内容を受け、提言書を事務局が修正し、座長・副座長より 12 月 24 日の提言書報告会において、市長に提言書を提出することに異議はないか。

全委員：異議なし。

座長：それではそのように座長、副座長、事務局で引き続き準備を進めていく。

4. 事務局より連絡

5. 経済環境部次長あいさつ

6. 閉会

以上